

# 地域の一員として自己の生き方を考えるためのカリキュラム研究 — パフォーマンス課題を取り入れたふるさと学習単元計画の作成を通して —

呉市立蒲刈中学校 伊藤 絵美

## 研究の要約

本研究は、地域の一員として自己の生き方を考えるためのカリキュラム研究について考察したものである。研究方法としては、まず、付けたい力を明らかにした上で、所属校の実態を分析し課題を把握する。次に、その要因を明らかにするために、カリキュラムマネジメント・モデルを用いて、所属校の総合的な学習の時間で実施しているふるさと学習のカリキュラムについて分析する。そこから明らかになった課題を改善するために、G. ウィギンズとJ. マクタイが提唱する「逆向き設計」論に基づき、カリキュラムの改善を行う。具体的には、ふるさと学習の単元にパフォーマンス課題を取り入れて、生徒が主体的に課題に取り組み、地域の一員として自己の生き方について考えるための単元計画の作成を行った。今後、作成した単元計画に基づく実践を行い、検証していく。

**キーワード：パフォーマンス課題 ふるさと学習単元計画**

## I 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年）には、総合的な学習の時間の目標として、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」<sup>1)</sup>と示されている。また、中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（平成20年、以下「解説」とする。）には、目標の趣旨の中で、「『自己の生き方を考えることができる』とは、一つには、社会や自然の中に生きる一員として、何をすべきか、どのようにすべきかなどを考えることである。」<sup>2)</sup>と述べられており、地域の一員として自己の生き方を考えることは一人一人にとって大切であると考えられる。

所属校では、平成27年度全国学力・学習状況調査における地域に主体的に関わる態度に関する質問事項の肯定的回答率が低く、地域の一員として自己の生き方を考えることに課題があることが分かる。その要因として、主体的に学習に取り組もうとする意欲に課題があることが考えられる。実際、平成27年度「基礎・基本」定着状況調査の生徒質問紙調査における課題発見・解決学習の振り返りに関する事項の肯定的回答率は低く、主体的に学習に取り組もうとする意欲に課題があることが分かる。田村学（2015）は、総合的な学習の時間で喚起されて高まっ

た意欲は各教科の学習活動の下支えになると述べており、所属校の総合的な学習の時間で実施しているふるさと学習において主体的に取り組もうとする意欲を喚起することが大切だと考える。

そこで、本研究では、ふるさと学習のカリキュラムを分析し、改善していく。具体的には、地域と関わりながら地域の課題解決に取り組むパフォーマンス課題を取り入れたふるさと学習単元計画を作成し、実践する。その際、生徒と地域の方との意見交換の場を設定するなどして、地域の方と協力して生徒の学習意欲を高めていく。このような実践が生徒の地域の一員として自己の生き方を考えることにつながると考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 地域の一員として自己の生き方を考えることについて

松浦善満（2000）は、学習指導要領の「『地域』とは、子どもたちが生まれ育っていく地域、子どもたちが現実に生活する空間」<sup>3)</sup>と定義しており、生徒は学校を含めた地域の中で育っていくことが分かる。「解説」には、「地域社会に生きるすべての人が、その地域ならではのよさに気づき、問題点を自分のこととして受け止めるとともに、日々の生活の

中で自己の生き方とのかかわりで考え続け、よりよい解決を目指して行動することが望まれる。」<sup>4)</sup>と述べられており、学校生活の中でも生徒一人一人が地域のことを自分のこととして考え続けていくことが大切であるといえる。

これらのことから本研究における「地域の一員として自己の生き方を考える」とは、地域のことを自分のこととして捉え、地域の一員として何をすべきか、どのようにすべきかを考えることと定義する。

## 2 所属校の課題と分析

地域の一員としての生徒の意識について、平成27年度全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査のうち、地域に関する質問事項の結果を表1に示す。

表1 全国学力・学習状況調査 生徒質問紙調査結果

質問事項	肯定的回答率(%)
(1) 地域や社会で起こっている問題や出来事に興味がありますか。	80
(2) 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。	50

質問事項(1)(2)から、生徒は地域のことに興味をもっているが、地域のために何をすべきか、どのようにすべきかを考えることに課題があることが分かる。これは、地域のことに興味をもっているが、地域をよくするために主体的に自分たちができることを考えようとする意欲が低いことを示している。このことは、各教科等の学習にも表れている。実際、平成27年度「基礎・基本」定着状況調査の生徒質問紙調査における課題発見・解決学習の振り返りに関する事項において、「学習の振り返りをするときには、『もっと考えてみたいこと』、『もっと調べてみたいこと』、『もっと工夫してみたいこと』などを考えています。」に答えている生徒の肯定的回答率は55.6%と低く、目標が明確でなく主体的に学習に取り組もうとする意欲に課題があることが分かる。また、平成27年度学校経営の内外環境の分析結果では、所属校の弱みの一つに、指示待ち傾向があり、自主的な学習を主体的に取り組むことができない生徒がいることが分かった。具体的には、日頃の学校生活において、宿題など与えられた課題に対

しては意欲的に取り組むが、自主的に行うように呼びかけている課題に対してはあまり意欲的に取り組むことができていないことが挙げられる。

これらのことから、所属校の生徒は、問題や学習に対して指示待ち傾向があり、主体的に取り組もうとする意欲に課題があるといえる。

## 3 所属校のカリキュラムの現状分析

所属校では、主体的に取り組もうとする意欲を身に付け、地域の一員として自己の生き方を考えさせるために、各学年、総合的な学習の時間の中でふるさと学習を行っている。具体的には、地域の方から話を聞いたり、福祉施設を訪問し、職場体験を行ったりしながら問題解決や探究活動に取り組んでいる。しかし、現状のふるさと学習では、主体的に取り組む、地域の一員として自己の生き方を考える学習になっていない。

そこで、田村知子(2014)が提唱するカリキュラムマネジメント・モデル<sup>(1)</sup>を用いて、ふるさと学習のカリキュラムを分析し、その要因を明らかにすることにした。次頁の図1は、所属校のふるさと学習に関する分析図である。

カリキュラムマネジメント・モデルによる分析から二つの課題が明らかになった。

一つ目は、「イ.カリキュラムのPDCA」の「C(評価)」が機能していないことである。地域の方や保護者、教職員にアンケートを実施しているが、その結果を分析し次年度の計画改善につなげることができていない。そのため、「A(維持・改善)」において、ふるさと学習の全体計画が改善されることなく、例年通りに維持・管理することに留まっている。また、現在の年間指導計画や全体計画を見ると、設定されている課題は、生徒が主体的に取り組むものになっておらず、評価場面や評価方法も明記されていない。これらのことが所属校の課題の要因になっていると考えられる。

二つ目は、「オ.リーダー」において、ふるさと学習推進担当の位置付けが明確になっていないことである。そのため、学習内容や評価方法を検討する場が設定できておらず、教職員で付けたい力の共通認識をもつことができていない。カリキュラムをよりよく動かしていくためには、推進担当の位置付けを明確にし、推進担当を中心としてカリキュラムを動かしていくことが必要である。

一方、強みもある。それは、保護者や地域が学校に協力的なことである。ふるさと学習においても、

地域の協力により職場体験活動を実施するなど、地域との協力により様々な活動が行われている。

#### 4 ふるさと学習に関わるカリキュラムの改善方針

本研究において、付きたい力を明らかにし、そこから遡ってカリキュラム設計を進めるG. ウィギンズとJ. マクタイ (2012)が提唱する「逆向き設計」論に基づいて、カリキュラムの改善を進めていくこととする。具体的には、ふるさと学習の中でどのような力を付きたいのかを明らかにし、その力を付けるために必要な学習活動や学習評価を考え、現状の

カリキュラムを改善していく。その際、所属校の強みである保護者や地域の協力を得て、生徒が主体的に学習に取り組めるようにしていく。

改善したカリキュラムをよりよく動かしていくための条件整備も合わせて進めていく。具体的には、ふるさと学習の推進担当を位置付け、推進担当を中心に、校内研修を設定したり、地域との連携窓口として地域連携を推進したりしていく。一人でカリキュラムを動かしていくことは難しいので、管理職や教務主任と連携し、年度当初の研修計画に、ふるさと学習に関わる校内研修の機会を設けるなど、学校全体の取組としていく。そうすることで、「カリ

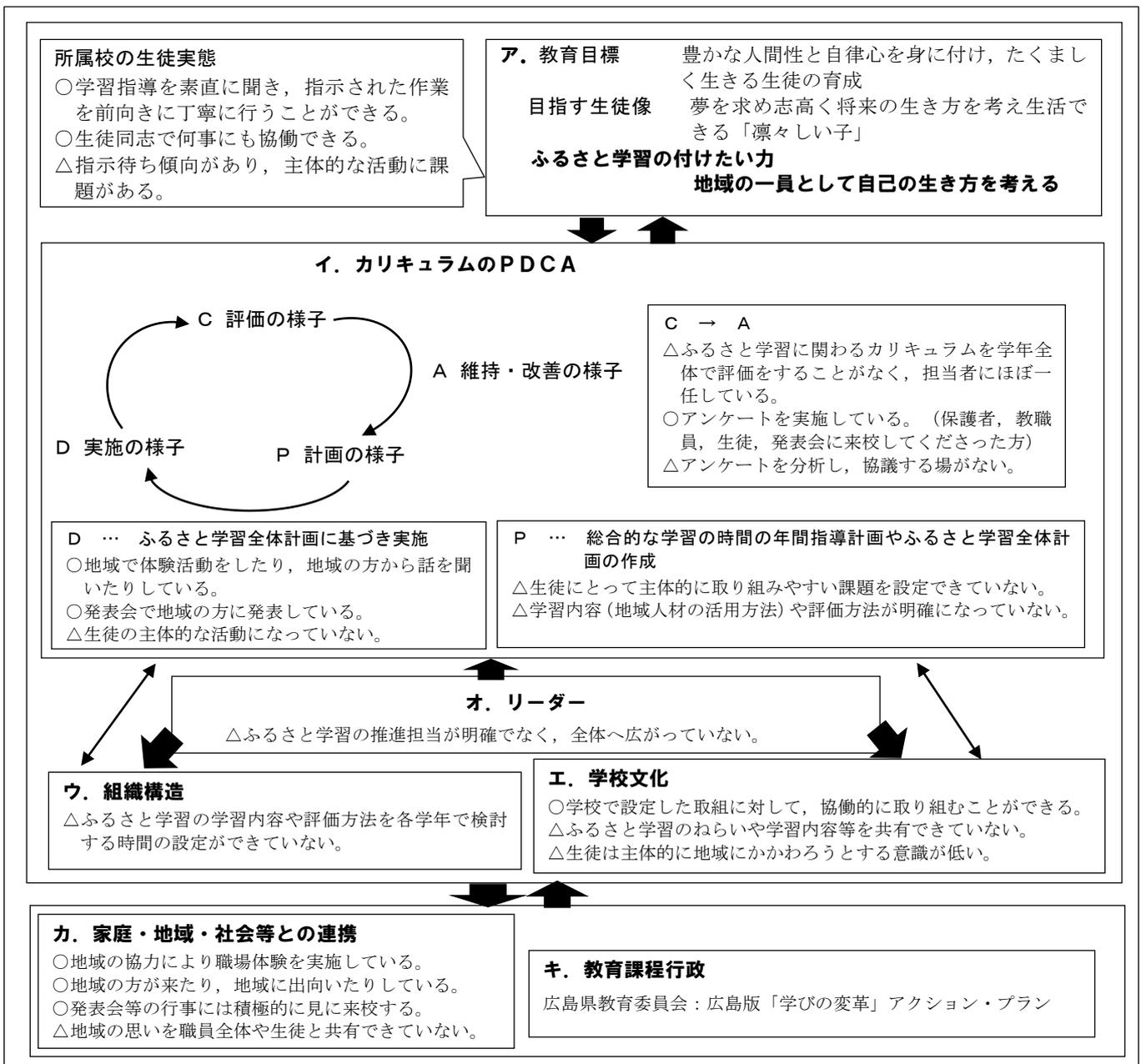


図1 カリキュラムマネジメント・モデルによる所属校のふるさと学習に関する分析図

キュラムのPDCA」における「C（評価）」の機能を高めることにもつなげることができると考える。

## 5 パフォーマンス課題を取り入れたふるさと学習単元計画について

### (1) ふるさと学習の現状とパフォーマンス課題について

ここまでカリキュラムマネジメント・モデルを用いたカリキュラムの現状分析や改善方針について述べてきたが、ここからはカリキュラムの具体的な内容について触れていく。先程も述べたが、現状のふるさと学習は、生徒が十分な興味・関心をもって取り組んでいるとはいえ、目標を意識して主体的に取り組むものになっていない。生徒が地域のことに関心・関心をもち、地域を自分のこととして捉え、地域の一員として何をすべきか、どのようにすべきかを考えようとする課題の設定が必要である。

所属校の総合的な学習の時間で実施しているふるさと学習は、地域を題材として、生徒が地域との関わりの中で得た知識やスキルを活用し、主体的に課題解決していくことをねらいとしている。そのため、設定される課題は、生徒が身に付けた知識やスキルを使いこなす課題が必要である。

西岡加名恵（2008）は、パフォーマンス課題について、「リアルな文脈の中で知識やスキルを使いこなすことを求める課題」<sup>5)</sup>と定義しており、生徒が自分の住む地域との関わりの中で得た知識やスキルを使いこなし、地域の一員として何をすべきか、どのようにすべきかを考えるふるさと学習を進める上で、パフォーマンス課題を取り入れることは有効であると考えられる。

### (2) パフォーマンス課題を取り入れたふるさと学習単元計画について

西岡（2008）は、カリキュラムにパフォーマンス課題を適切に位置付ける指針の中で、目指す生徒像から学習単元計画を逆向き設計に立てていくことと、指導が行われる前に評価方法を先に構想することの大切さについて述べている。この指針は、本研究におけるカリキュラム改善の方針にも合っており、カリキュラムの具体的な内容の改善において、有効に活用できると考える。

目指す生徒像から学習単元計画を逆向き設計に立てていくことについては、地域の一員として自己の生き方を考えるという目指す姿を明らかにした上で、そのためにどのような知識やスキルが必要なの

かを整理し、その知識やスキルを使いこなすことを求めるパフォーマンス課題を設定し、その課題を取り入れた学習単元計画を作成していく。

評価方法を先に構想することについては、生徒と地域の方の意見交換の場を設定し、地域の方の声を生徒に届けるようにしていく。渡辺文（2014）は、地域の方から指摘を受けると、次の発表に向けてさらに調べたり考えたりしていけるようになると述べている。このことから、地域の方から意見を聞くことにより、生徒の主体的に課題に取り組む意欲を喚起できると考える。

## III ふるさと学習単元計画の作成の実際

### 1 ふるさと学習単元計画の作成のプロセス

先に述べたカリキュラムの改善方針に沿って、校内研修を中心としたカリキュラム改善計画を作成し、実施した。実施した内容を表2に示す。

表2 校内研修を中心とした主な内容などと対象者

実施日	実施した内容	具体的な内容	対象者
12/9	校内研修①	単元計画作成に向けての概要説明、ふるさと学習の振り返り、付けたい力の共有	全教職員
12/14	地域との連携	地域の方とねらいの共有、地域の方の思いをインタビュー	地域の方
12/19	校内研修②	パフォーマンス課題作成	全教職員
1/5	校内研修③	評価基準、学習計画の作成	全教職員
1/13	学年部との連携	学習計画の修正	教員

第1回校内研修では、今年度のふるさと学習の課題を明らかにし、生徒に付けたい力について全教職員で共有を図った。これまでのふるさと学習を振り返り、地域にある人材や素材をどのように活用することが付けたい力を身に付けるために有効なのかを各学年で話し合った。

地域との連携では、推進担当が、まず、第1回校内研修での意見を参考に、地域の活用についての情報を整理し、その分野で専門的に活動している人や施設をリストアップした。そして、リストに挙げた人や施設に連絡を取り、来年度のふるさと学習をよりよいものにするために、地域の方との関わりを必要としていることを伝えて訪問の段取りを行った。訪問時には、生徒に付けたい力を説明した上で、地

域の抱える課題や地域に住んでいる子供たちへの思いについての聞き取りを行った。ここで聞き取った内容は、パフォーマンス課題作成時に活用されるものとなる。

第2回校内研修では、各学年でパフォーマンス課題を作成した。まずは、各教科のパフォーマンス課題の例を提示して、パフォーマンス課題のイメージを共有した。その後、「地域の一員として自己の生き方を考える」ためにどのような活動が必要なのか、課題設定場面でどのような工夫をすれば生徒が主体的に課題に取り組むことができるのかを考えて、パフォーマンス課題を作成した。

第3回校内研修では、ふるさと学習単元計画の作成を行った。作成したパフォーマンス課題を単元に位置付け、課題解決に必要な学習活動を設定した。その際、評価場面を明確にし、その評価基準を考えた。常に付けたい力を意識することで、必然性のある活動が設定され、生徒が主体的に活動できるものとなった。

学年部との連携では、パフォーマンス課題の提示の場面と地域の関わり方など単元計画の細かな部分について検討を行った。

それぞれの研修で、教職員から出された意見を表3に示す。

表3 校内研修で出された教職員の代表的な意見

校内研修①	<p>&lt;実態把握&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域にどのような人材がいるのかを把握することが必要である。</li> <li>・今のカリキュラムだと生徒が主体的に取り組めていないので、現状について身をもって感じさせて生徒に考えさせることが必要である。</li> </ul>
校内研修②	<p>&lt;パフォーマンス課題の作成に向けた焦点化&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分にできることは何かという視点で深めていきたい。</li> <li>・焦点をしばって取り組ませることが大切である。</li> </ul>
校内研修③	<p>&lt;ふるさと学習単元計画の作成&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作成したパフォーマンス課題を単元計画に位置付けることで付けたい力やその評価方法などを具体的に考えることができた。</li> <li>・ふるさと学習において地域と連携することのよさについて再認識できた。</li> </ul>

表3に、「生徒が主体的に取り組めていないので、現状について身をもって感じさせて生徒に考えさせることが必要」とあるように、校内研修を行うことで、教職員全員でふるさと学習の課題と来年度の方向性を共有することができた。また、「パフォーマンス課題を単元計画に位置付けることで付けたい力

やその評価方法などを具体的に考えることができた」とあるように、パフォーマンス課題を位置付けることで、付けたい力や評価方法などの具体を共有することができた。

## 2 パフォーマンス課題を取り入れたふるさと学習単元計画の作成の実際

### (1) パフォーマンス課題とその評価基準

生徒がリアルな文脈の中で課題解決ができるように、地域の抱える課題を用いたパフォーマンス課題を作成した。第3学年で作成したパフォーマンス課題を例に挙げて説明する。第3学年では、地域の方の「たくさんの人に藻塩の良さを知ってほしい」という思いを取り入れて、表4に示すパフォーマンス課題を作成した。このパフォーマンス課題は、次のような形で提示する。課題設定場面で、生徒に藻塩づくりなどの体験を通し藻塩の良さに気付かせる。その後、地域の方に、藻塩があまり知られていない現状ともっとたくさんの人に藻塩の良さを知ってほしいという思いを語ってもらい、生徒の「藻塩の良さを多くの人に広めたい」という思いを引き出し、課題設定を行う。この課題が表4に示すパフォーマンス課題となる。ただ体験活動をするだけでなく、地域の方の協力を得て、生徒がリアルに感じる課題設定場面を創出する。このように、作成したパフォーマンス課題をそのまま提示するのではなく、生徒がよりリアルな課題として捉えることができるように、地域の協力を得ながら導入場面の工夫を行っていく。

表4 パフォーマンス課題とその評価基準

第3学年	パフォーマンス課題	地域で藻塩づくりに関わっている代表にインタビューに行ったとき、次のような思いを話してください。「地元の中学生たちには、蒲刈の魅力の1つである藻塩を誇りに思い、たくさんの人に藻塩の良さを伝え、観光客がたくさん来てくれる方法を考えて、蒲刈を活性化させてほしい。」しかし、実際には、藻塩の本当の良さを知っている人は多くありません。そこで、藻塩をより多くの人に知ってもらい、蒲刈を訪れる観光客を増やすために藻塩をどう生かせばよいかをグループで考えることとします。たくさんの人に藻塩の良さを知ってもらい、観光客を増やすための方法について考え、実行したことをまとめ発表してください。発表内容は、蒲刈の中学生として観光客の増加を意識して藻塩の良さを伝えるには何をどのようにすれば地域に貢献できるかまで述べてください。まとめた内容は、小学生をはじめとする地域の人の前で発表します。		
		A	B	C
	評価基準	地域の一員として藻塩の良さを伝えるために、実現可能であり、期待する効果がある取組を考えて発表している。	地域の一員として藻塩の良さを伝えるために、実現可能であるか期待する効果があるか、どちらか一方が入っている取組を考えて発表している。	地域の一員として藻塩の良さを伝えるために、実現性や期待する効果について考えずに発表している。

生徒は、前頁の表4に示すパフォーマンス課題を解決するために「蒲刈の良さはどのようなところか」「その良さをどのように伝えればよく伝わるのか」「今まで蒲刈では藻塩の良さを伝えるためにどのような取組をしているのか」などについて考え、インタビューや体験等を通じて情報を収集したり、収集した情報を整理・分析したりして、解決していくこととなる。表4に示す評価基準を見ると、「実現可

能であり、期待する効果がある取組を考えて」とあり、それらの取組を考えるためには、情報収集や整理分析をする場面で、蒲刈の藻塩の特徴を捉えて自分がそこで何ができるかなどについて考えたり、他地域の地域振興政策について調べ、どのような取組が効果を上げるのかなどについて把握したりする必要がある。

パフォーマンス課題を共有する際に、表4に示す

表5 ふるさと学習単元計画

学年 第3学年 単元名 藻塩を広めて観光客を増やそう！自分のため、蒲刈のため！！ 単元の目標 自分たちが地域に貢献できる活動について自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断して、地域の一員として自己の生き方を考えることができるようにする。			
学習活動	時数	評価方法	備考（地域の関わりなど）
<b>課題の設定</b> ○ 蒲刈の自然・環境、産業、文化・交流の良いところや課題を振り返る中で、産業に着目する。	1		
○ 藻塩づくりの体験をしながら、地域の方の話を聞いて藻塩の良さや課題に気付く。	1	自己、教員 (ワークシート)	*藻塩づくりの体験に取り組む態度を評価する。(地域の方)
○ 地域の方の話を聞いて <b>パフォーマンス課題</b> を知る。	3		*話を聞く態度を評価する。(地域の方)
<p>地域で藻塩づくりに関わっている代表にインタビューに行ったとき、次のような思いを話してくださいました。「地元の中学生たちには、蒲刈の魅力の1つである藻塩を誇りに思い、たくさんの人に藻塩の良さを伝え、観光客がたくさん来てくれる方法を考えて、蒲刈を活性化させてほしい。」しかし、実際には、藻塩の本当の良さを知っている人は少ない。そこで、藻塩をより多くの人に知ってもらい、蒲刈を訪れる観光客を増やすために藻塩をどう生かせばよいかをグループで考えることとします。たくさんの人に藻塩の良さを知ってもらい、観光客を増やすための方法について考え、実行したことをまとめ発表してください。発表内容は、蒲刈の中学生として観光客の増加を意識して藻塩の良さを伝えるには何をどのようにすれば地域に貢献できるかまで述べてください。まとめた内容は、小学生をはじめとする地域の人の前で発表します。</p>			
○ 自分たちで貢献できる藻塩の普及について考え、計画を立てる。(グループ活動)		自己、相互 (ワークシート)	
<b>情報の収集</b> ○ インタビュー、調査、観察、体験等を通して情報を収集する。 ○ インターネットや本等を使って資料を収集する。	3 2	自己、教員 (ワークシート)	*インタビューに取り組む態度を評価する。(地域の方)
<b>整理・分析</b> ○ 収集した情報を基に、藻塩の普及に向けた活動の取組や計画を筋道立て、論理的に整理する。	6	自己、相互(ワークシート)	
<b>まとめ・創造・表現</b> ○ まとめた取組を基に藻塩の普及に向けて地域の人から意見をいただき、修正しながら地域貢献活動を実施する。 ○ 実施した活動をまとめる。	5 4	自己、教員 (ワークシート)	*地域貢献活動に取り組む態度を評価する。(地域の方)
○ 小中合同発表会に向けて、発表のためのプレゼンテーション資料を作成する。 ○ クラス内で発表し、表現や内容を修正する。	4 2	相互(発表内容)	
○ 小中合同発表会で発表する。	1	自己、教員 (ワークシート) (評価基準:パフォーマンスの評価)	*発表会でのパフォーマンスを評価して、アンケートに記入する。(地域の方)
○ 地域の方のアンケートを基に、藻塩の普及を通して学んだ活動を振り返る。	1		
○ 地域の方の声から藻塩の普及の貢献度を確かめて、新たな課題を設定する。	2		*貢献度から新たな課題を見つけようとする態度を評価する。(地域の方)

評価基準も合わせて生徒と共有していく。評価基準を共有することで、生徒は自分のパフォーマンスについて自己評価を行うことができ、自分自身で振り返りをしながら次の活動をよりよいものにしていくことができるようになる。

## (2) パフォーマンス課題の解決に向けたふるさと学習単元計画

作成した第3学年のふらさと学習単元計画を前頁の表5に示す。この単元計画の特徴は2点ある。

1点目は、地域の抱える課題を用いて作成したパフォーマンス課題を単元計画に位置付けたことである。単元の導入場面で地域での体験活動を取り入れ、体験活動を通して感じた藻塩づくりにおける課題をパフォーマンス課題につなげている。このように展開することで、生徒は自ら蒲刈の藻塩を多くの人に広めたいと考え、主体的に課題解決に取り組むこと

ができる。また、パフォーマンス課題の解決には、自分の住む地域との関わりの中で得た知識やスキルを使いこなし、地域の一員として何をすべきか、どのようにすべきかを考える必要があり、付きたい力の育成につながる単元計画となっている。

2点目は、地域の関わりを明記したことである。地域の方の声を生徒に届けるために、活動ごとに評価場面を設定し、地域との関わりの中で、地域のリアルな声を生徒に届けるようにした。このように、地域の方との関わりの中で、地域のことを自分のこととして捉え、主体的に課題に取り組むことができると考える。また、地域の関わりを単元計画に位置付けることで、地域の方との事前の打ち合わせに役立つと考える。

## (3) 地域の関わりについて

地域の関わりは、生徒の意欲を高めたり、生徒が

### 第3学年評価シート（地域の方用）

#### 単元を通しての目標

主体的に意欲をもって地域の課題に取り組み、地域の一員として自己の生き方を考える。  
(地域のために、自分ができることを考える)

#### 本時の目標

地域の方の意見を生かした上で、観光客の増加を意識して藻塩の良さを伝える取組を考えようとしている。

#### 学習内容

まとめ・創造・表現…藻塩の普及に向けた取組のまとめ

生徒の取組の状況	声かけの例
実現可能であり、期待する効果がある取組を考えているとき。	簡単にできて、観光客も増えそうだねえ。それが実現できたら、蒲刈みんなにとって役立つものになるなあ。
実現可能であるが、期待する効果は見られない取組を考えているとき。	簡単に藻塩を広めることができ、みんなに知ってもらえそうだねえ。でも、私たちがやってみて～だったので、そこにもうひと工夫してみるともっと効果が期待できるなあ。
期待する効果はあるが、実現可能でない取組を考えているとき。	中学生としてこんな観光客を増やすのに効果がありそうな取組が考えられるのはすばらしいなあ。でも、実際にこの取組はみんなだけでできるかなあ。もう少し～すれば、みんなでもできる気がするなあ。
実現可能でなく、期待する効果もないとき。	藻塩の良さはわかったかな？藻塩を使って何かできることはないかな？例えば、～があるよ。

生徒の名前	メモ（気付きなど）
伊藤	パンフレット（実現可能）、蒲刈の販売所（効果あり）

図2 第3学年評価シート

自己の生き方について考えたりすることにつながるものである。しかし、地域の関わりをよりよいものにしていくためには、学校としての方針を地域の方に明確に伝えるとともに、地域の方が働きやすいように状況を整えていく必要がある。そこで、地域の方が生徒に声かけをする場面で活用することができる評価シートを作成した。評価シートの一部を前頁の図2に示す。この評価シートは、地域の方が生徒一人一人を評価するものではなく、生徒のよい行動を認め、励ますことを目的としている。シートの表の上部にある評価基準は、生徒の行動を見取り、声かけをする際の参考にするものである。例えば、藻塩の良さをアピールしたパンフレットを作成し、配布する取組は、藻塩の販売所に置いてもらうなど実現可能であり、期待する効果も得られることが予想される。その取組に対して、地域の方は、その取組を認め、「簡単にできて、観光客も増えそうだねえ。それが実現できたら、蒲刈みんなにとって役立つものになるなあ。」といった励ます声かけができるようになっていく。また、よい行動があれば、下部のメモ欄に記録を残してもらおう。そうすることで、後から教師によるフィードバックが可能となる。

評価シートを活用し、地域の関わりをよりよいものにつなげ、学習を進めていくことで、生徒の主体的に課題に取り組む意欲を喚起し、地域の一員として自己の生き方について考えることができるようになる。

## IV 研究のまとめについて

### 1 研究の成果

学力調査等の結果から明らかになった所属校の課題について、カリキュラムマネジメント・モデルを用いた分析でふるさと学習のカリキュラムに要因があることを見いだすことができた。そして、G. ウィギンズとJ. マクタイが提唱する「逆向き設計」論に基づき、カリキュラムの改善を行うことができた。具体的には、地域の抱える課題を用いたパフォーマンス課題を位置付けた単元計画を作成するとともに、地域の関わりを生かすために、地域の方が生徒のよい行動を認め、励ます評価シートを作成することができた。

### 2 研究の課題

本研究において、主体的に取り組もうとする意欲

が低いという課題に対して、ふるさと学習だけを充実させても課題の改善は難しい。そこで、ふるさと学習で喚起されて高まった意欲を各教科等の学習につなげていく取組が必要となる。今後は、ふるさと学習だけでなく、学校教育全体の中で、主体的に取り組もうとする意欲を高める指導を充実させる必要がある。

ふるさと学習の「カリキュラムのPDCA」における「C（評価）」が機能していないという課題に対して、年間の研修計画内に、カリキュラムの見直しを行う校内研修を設定した。今後、今回作成したカリキュラムをよりよいものに改善していくために、カリキュラムを実施していく中で明らかになる課題を整理し、次年度の改善につなげていく必要がある。

### 【注】

(1) 教育課程行政においては、「カリキュラム・マネジメント」と表されるが、中留・田村は、カリキュラムとマネジメントを分けるのではなく、「つなぐ」ことを重視する観点から、「カリキュラムマネジメント」を使用しており、本稿でもそれに倣う。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領』 p. 116
- 2) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』教育出版 p. 16
- 3) 松浦義満（2000）：『地域を生かせ！総合的学習の展開』東洋館出版 p. 69
- 4) 文部科学省（平成20年）：前掲書 p. 54
- 5) 西岡加名恵（2008）：『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書 p. 9

### 【参考文献】

- 田村学（2015）：『授業を磨く』東洋館出版  
田村知子（2014）：『カリキュラムマネジメントー学力向上へのアクションプランー』日本標準  
G. ウィギンズ/J. マクタイ著 西岡加名恵訳（2012）：『理解をもたらすカリキュラム設計ー「逆向き設計」の理論と方法』日本標準  
渡辺文（2014）：「学習指導要領における指導のポイント」『初等教育資料4』文部科学省教育課程課/幼児教育課  
有園格・小島宏（1999）：『「総合的な学習」の理論と実際』ぎょうせい  
西岡加名恵・田中耕治（2009）：『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校』学事出版  
石井英真（2015）：『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』日本標準